

「豚の報い」論

—新しい伝統と現代の精神—

A Study on “The Reward of the Pig”

—Renewal Tradition and Modern Spirit—

宇 野 憲 治

Kenji UNO

“The Reward of the Pig” written by Eiki Matayoshi, basically involves the ‘high power’ of people who are trying to lead a positive life, even though their lives are possibly endangered by death.

What does the ‘healing of the soul’ mean to the people of the modern world, which is full of loneliness and conflicts? This work has come up with a new way of salvation for the lost and struggling people. They can be saved by creating a new ‘Utaki’ (a place for prayer).

This seems to describe the reality of Okinawa, and indeed it extends beyond Okinawa. Therefore, it is likely to appeal deeply to the hearts of all of us today.

又吉栄喜「豚の報い」は『文学界』十一月号（平成七年十一月一日）に発表され、選考の末、第百十四回（平成七年度下半期）芥川賞を受賞した。

「受賞のことば」として、作者は、「たいへん身近な所に、たいへん深いものがひそんでいるというふうな認識を豚から得たような気がします」「海

面下に沈んでいる氷山のような沖繩の原風景が私の創作をささえ、かつ突き動かしています」「今回ほど沖繩や本土の将来を真剣に考えている人達のアたたかい心に触れた経験はありませんでした」と言っている。確かにこの作品は、芥川賞を受賞しただけあって、今の日本の伝統のありようと

今後の問題について、多大な示唆を与えてくれる作品であると私は思う。

まず、各選者の「芥川賞選評」について、簡単にみてゆこうと思う。「沖繩」という固有の風土で生きる庶民の息づかいや生命力を、……野太く描きあげた」・「一種の希望」(宮本輝)、「沖繩を描いて沖繩を超えている」(河野多恵子)、「沖繩という一つの宇宙存在」・「風土の個性を負った小説」(石原慎太郎)、「新しい聖所」・「若い主人公のその反伝統的な精神のドラマ」・「自己革新のヴェクトルを秘めた小説」(日野啓三)、「力に満ちた作品」・「哄笑を誘う文学」・「沖繩という地の力」(池澤夏樹)、「時間がよく伸びて、節目節目で、笑いの果実をつけ」(古井由吉)、「神と人が対等に言葉を交わすかの如き明るさと軽やかさ」・「信仰の素朴な在り方」(黒井千次)、「読んでから時間が経って思い直すと、浮かんでくる情景の強さ」(大庭みな子)、「沖繩の女性像の独特さとして一般化できそう」・「本当に書くべき小説に出会えた人」(大江健三郎)と、絶讃に近いほめぶりである。ただし、一応は認めるものの、「生命力の奔騰を描いて読者を刺激し、さあこれからどうなるのかと期待させて置きながら、決着がうまくついてゐない」(丸谷才一)、「作者の目ざす方向に走りすぎる」(田久保英夫)、「沖繩文学として底の浅さを感じられる」(三浦哲郎)、「という否定的評価もある。これらの選者の選評を念頭におきながら、以下、私の目で「豚の報い」を考察してゆくことにする。

一 虚と実

「豚の報い」は題からして、何とも奇妙な小説である。又吉栄喜は「豚

の報い」に関して次のように発言している。

「小学生のとき、正月料理用の豚がトラックで搬送される途中パンクして傾いて、豚が何頭も大通りを逃げ惑うのを見たことがあるんです。豚は肉にされる運命を予感していたのか、両脇の店に飾られた正月用品にぶつかりながら形相を変えて逃げている。その光景が頭に残っていていつか書きたいと思っていました。正吉という主人公と三人の私たちの話は自分の空想の世界です。人生のいろんな苦悩を背負っている人間たちの魂の癒し、そういうテーマを考えたんです。」

とある。また別の箇所で、

豚というのは沖繩では食生活の中心でもあり、正月とか清明祭(陰暦の清明節に行われる先祖の墓参り)とか、年中行事の主たる御馳走でもあります。それから神様にお供えする料理でもあります。沖繩の人は豚肉が大好きですし、神様たちも豚肉が大好きなんです。沖繩の人と沖繩の神をつなぐ媒体としても豚肉は存在するわけです。

(又吉栄喜×池澤夏樹「土地の輝き、霊の力」

『文学界』三月号 平成八年三月一日)

と述べている。テーマについては「苦悩を背負っている人間たちの魂の癒し」であると述べており、問題点としては、小説創作上の「虚実」の問題と、「豚」のもつ「聖俗」の問題とがある。その「豚」を導き手として、スナックで働く女性たちが、神聖なる真謝島の御嶽という霊場へ参る、その御嶽は正吉の父の骨を祭って出来たものであるが、「一つの御嶽縁起譚」(池澤夏樹)として話は展開する。

テーマについては後で触れるとして、虚と実の問題について、まず考え

てみる。

作品中に真謝島という島がでてくるが、真謝島という島は実際には存在していない。この島に関して、

津堅島というのが勝連半島の先にあつて、真謝島はそこをモデルにしたんです。もともと津堅島とか久高島は神の島といわれていますからね。二つの島には御願所という拝みどころがたくさんあつて、特に久高島は沖繩をつくった神様が最初に降りてきた、最も有名な聖域という島ですから。今回扱ったこの真謝島の風葬は、実際に久高島にほかが学生のころまでありました。大学一年のとき、十二年に一回しかないイザイホーの祭りに行つて、その時に風葬も見てきたんです。その後、法的にできなくなったとききましたが。

（前掲、又吉栄喜の発言）

と言っている。「真謝島」にしても「風葬」にしても、この小説が事実をありのまま記したのではないが、実際に存在する島をモデルとしたり、実際に起こった事件なり、見聞した風習・日常生活をヒントとしている故、虚構ではあるが、読者に、リアリティをもつて迫ってくる。

*

ここで、まず、作品の略筋を見ておく。

「月の浜」というスナックに豚が闖入し、ショックを受けた和歌子はマブイ（魂）を落としてしまう。居合わせた正吉はユタの真似をして和歌子にマブイを込める。その後、厄落としのため、女性三人（ミヨ・暢子・和歌子）と正吉は、正吉の故郷である真謝島に御願に行くことに決める。一方、正吉には、風葬されている父の骨を、門中墓に納めるといふ別の目的

「豚の報い」論

がある。このようにして一行四人の珍道中が始まる。一行は、正吉の知り合いの民宿に泊まることとなる。主人は留守であったが、宿のおかみも呼び、飲めや食えやの大きわざとなる。酔ったおかみは月を見ようとして窓から落ちて怪我をする。正吉は、おかみを背負つて医者につけける。御嶽参りの当日は大雨で、お参りを延期する。主人は先日一件のお礼として、豚の内蔵をもつて来てくれる。みなおはおいしく食べたもののその豚があたり、女三人と宿のおかみと医者と看護婦は大変な下痢となつてしまう。七転八倒の末にやっと回復する。翌日はうそのような上天気、念願の御嶽参りとなる。その間に、正吉は父の風葬地にゆき、父の骨と対面する。門中墓に納めようかと迷うが、このままここに置いておくのが父のためと、ここを墓所とし、父の骨を祭つて、正吉なりの思いで、ここに新しい御嶽をつくる。この御嶽にみなを案内しようとするが、正吉はどうも気がとがめ、みなにほんとうのことを話す。「……私は正吉さんの御嶽を信じるわ。淋しくなった人が巡拝する御嶽よ」という和歌子の一声で、みな迷わず正吉のつくった御嶽に参ることとなる。正吉が先頭に立ち、暢子と和歌子が並び、すぐ後にミヨが、最後におかみが続く、という話である。

二一 肯定的生き方

この物語の最後のあたりのところに、「豚の報い」という奇妙な題名の由来と筆者の現実認識のあり方が端的に表されている箇所がある。

「おばさん、今日はいいい日なんだ。こないいい日になったのも、おじさんが豚肉を食べさせてくれたおかげだよ。いや、ほんとだよ、皮肉

じゃないよ。豚もたいしたもんだよ」

「豚が？」

「人助けをした豚だよ。みんな、救われるんだ。な、おばさん、な」

正吉はまた気分が高揚した。おかみは曖昧にうなづいた。

「試練がないと、悟りにはいたらないのよね、ね、正吉さん」

和歌子が言う。

「何だね？、むつかしいけど」

おかみが聞く。

「おなかをこわしたから、みんな救われるという意味よ、おばさん」

「何か変だね」

「もとはといえば、おばさんのおかげよ」

「うちの？」

「そう、おばさんが窓から落ちて、怪我したから、おじさんはお礼に私

たちに豚肉を届けたんでしょ？」

「そうかね？　そういうもんかね？　でもさ、そういうんなら、うちに

酒を飲ませた、あんたたちのおかげだよ」

「そうね、私たちが飲ませたのよ。でも、一番の功績は正吉さんよ、正

吉さんがこの民宿に泊まったんだから、ね、正吉さん」

「それをいうなら、店にはいりこんできた豚だよ」

「ほんと、よかったね、お店の前に、豚がおっこちてきて」

「私がドアを開けっぱなしにしておいたからよ」

暢子が言った。

「じゃあ、一番の手柄は暢子姉さんね」

とある。「報い」というと、マイナスイメージで考えられ勝ちであるが、この作品のこの箇所を見る限りでは、現実を肯定的に捉え、最終的には「豚の報い」を有難いこと、よいこととして受け止めている。

今、一行は御嶽参りをしている。空はよく晴れ、「今日はいい日なんだ」と言い合っている。そして、こんな「いい日」に会えたのは、結局、「豚のおかげ」なのだということになる。「今日はいい日なんだ」↓「おじさんが豚肉を食べさせてくれた」↓「おばさんが窓から落ちて」↓「うちに酒を飲ませた」↓「正吉さんがこの民宿に泊まった」↓「店にはいりこんできた豚」↓「私（暢子）がドアを開けっぱなし」……と、「いい日」に会えたことから逆算してゆくと、悪いこともすべて肯定されてしまう。「結果がよければすべてよくなる」という現実肯定的生活力が、この根底にあるように思われる。

順番にたどって見れば、「豚の闖入」は不吉なことであるし、酒を飲みすぎて「おばさんが窓から落ちて」怪我をしたことは、不幸なことであるし、「食当たり」するのも、「大雨が降る」のも、よいこととはいえない。一つ一つの現実を、よくないこと、よくないことと否定的に考えてしまえば、この否定的現実を押しつぶされてしまうが、それを、この「豚の報い」のような発想で認識して行くと、生を肯定し、自然と苦しさを克服することができのではないかと思う。「沖繩の勢いの強さ」とか「元氣さ」（池澤夏樹）とか言うのは、この現実認識からきていると思う。否定的現実を肯定的に認識し、日常を「元氣」に生きて行く原初のエネルギー、この元氣さは、実は近代都市に生きる我々に欠除しているものなのではなからうか。

又吉氏は次のようにも言っている。

沖繩というところには、日常の中に苦悩と癒しとが背中合わせにあります。ある日苦悩を背負って大変苦しんでいた人が、トートローメ(位牌)にお祈りすることによって翌日はカラッとして元氣を取り戻してしまふ、……

沖繩の女性はずぐ悲しんだり泣いたり、びっくりしたりするんですけど、けれども、しばらくすると一転して元氣がでる……

(前掲「土地の輝き、靈の力」)

とある。まさに、否定的現実を転じて、肯定的生き方をとるのである。その転換の契機となるのが、先祖であったり、御嶽であったり、ユタの言葉であったり、またそれに代わる魂を癒してくれるものである。「苦悩を背負っている人間たちの魂の癒し」となるものが、また、今を生きる沖繩の人たちの「魂の癒し」となるものが、まさに、転換の契機となるものなのである。

「豚の報い」における二人の女性の心の癒しは、結果的には「御嶽参り」であるわけだが、ユタ的な性格を持つ正吉の存在も大きな役割をになっている。

ともあれ、否定的現実をこのような聖所に参る、参ろうとすることによって、すべてを肯定的生き方に変えようとする元氣さが、この作品の根底を流れている。

三 あの世界とこの世「死と生」の世界

「生と死」ということを考えて見るに、「生」は言うまでもないことだが、「生」に対比されて「死」の影が全編に色濃く描出されている。冒頭に、

豚の、スナック「月の浜」への闖入が正吉と三人の女を真謝島に向かわせている。四人は今、渡し舟を待っている。豚がもたらした厄を落とすための真謝島ゆきが決まった三日前の水曜日から正吉はピップエレキバンを二個首に貼っていた。

とある。この「月の浜」の「月」は黄泉の世界を暗示し、「スナック月の浜」はその入り口と思われる。「豚の闖入」は、我々をこの世からあの世へ導く契機ともなっている。「ピップエレキバンを二個も」貼った正吉は神の島(死の島)真謝島に向かうため、「渡し船」を待っている。これは、この世からあの世へ渡す、「三途の川」の「渡し船」を暗示しているように私には思われる。

ミヨがバナライスクリームを食べながら足早に正吉に近寄ってきた。口紅が白いバナライスクリームにくっついている。ミヨの少し厚めの唇は色が落ち、妙に弱々しかった。ミヨは黒いロングスカートを手にはさみ、正吉の正面にしゃがんだ。

「私、隣の人に、女ともだちの葬式に出てきたのよ」

とある。「葬式」に行くのは嘘であるのだが、「口紅」「白いアイスクリーム」「黒いロングスカート」「ミヨの色のおちた唇」等は、生と死の対比を如実に表現している。俗なるものと聖なるものと言いかえてもよい。また、

別の箇所では、

和歌子は白いストラックスをはき、濃いグリーン टीーシャツから出たほっそりとした白い首には数珠に似たネックレスをしている。赤いスカートをはいた暢子はチューインガムをかんでいる。白い光の中に赤くくつきりと描いた細い唇が別の生き物のように動いていた。ミヨは黄色と白のストライプのはいたパラソルをさしている。

三人の女たちの笑い声が消えた。黒いワンピースを着た二人の老女が船室から出てきた。後から出てきた三人の老人も大きめの黒い背広を着、黒いネクタイをしめている。黒い着物の老女を両側からささえている二人の中年の女も黒いワンピースを着ていた。

「葬式の帰りかしら？ 今から行くのかしら？」

和歌子が言った。

「帰りなら、ほっとしているでしょうよ、表情が……」

とある。ここにも、「白いストラックス」・「白い首には数珠に似たネックレス」・「赤いスカート」・「白い光」・「別の生き物のように」・「黄色と白のストライプ」……と「黒いワンピース」・「黒い背広」・「黒いネクタイ」・「黒い着物」・「葬式」……等、日常生活における「生と死」の対比がよく描出されている。また、「帰りなら、ほっとしているでしょうよ、表情が……」とあるが、この場面の雰囲気、「三人の女たちの笑い声が消えた」というところからして、葬式に向かう途中であるということがわかる。「死の島」から「生の島」へ船で渡り、生きている者を抱き取りに行くことを暗示しているのではないかと思われる。

「おじさんは葬式に行ったんですって？ おばさん」和歌子が言った。

「食べ物の次は葬式の話なの？」

暢子が両手をひろげ、首をすくめた。

「今年は若い人だけど、去年は年寄りだったよ。前島のおばあよ、正吉、西原村の長男の家にやっかいになっていたけどね。島から出たらひとりひとり死んでいくんだから、ほんとに淋しくなるよ」

とある。民宿に泊まると、「区長は真謝島出身の十七歳の少女の葬式に出るために本島の勝連村に行っている」とおかみが言う。「島から出たらひとりひとり死んでいく」とも言う。島↓本島↓島へ、誕生↓生↓死……という、人間の一生を暗示しているようにも思える。

*

また別の箇所に

白い一本道は果てしなく続いている。正吉とミヨの真黒い、短い影が少しずつ進む。正吉は足元だけを見続けた。天は光が強く見上げられず、海や、野菜畑を見ようと首を回すと、ミヨの頭がゆれた。ミヨはずりおちている。正吉は立ちどまり、反動をつけ、背負いなおした。「……私の母親は入院している父親より、先に死んだのよ、看病疲れよ……」とミヨが言った。

「ほんとうの私の気持ちはね、父親に死んで欲しかったのよ、怖い話だけだね、でもね、父親は今も生きているけど、妻と娘の区別がつかなくなっているのよ」

とある。下痢をして死ぬ思いから助かったミヨは、「白い一本道」を正吉に背負われて帰っている。死からの生還といったところか。助かったミヨは死んだ母のことを考えている。父は生きてはいるけれど、「妻と娘の区

別がつかない」状態である。この「白い一本道」は、私には、生と死（この世とあの世）を橋渡ししている「二河白道」の「白い一本道」に思えて仕方がない。

「白い一本道」は別のところにも出てくる。

ほどなく父の骨の解決はつくが、女たちはどうしよう、どの御嶽に連れていったらいいのだろうか、と正吉は一本道を歩きながら考えた。

正吉は白い一本道の途中から浜におり、ほんやりと琉球松の木陰に座った。……（中略）……

正吉は立ち上がり、足を早めた。帽子の中から汗がもみあげに垂れ、首筋に入った。白い一本道は変に静まり、両脇の低い灌木や野菜の葉がゆれている。

とある。この「白い一本道」も前の例と同様の意味をもっている。父の世界と女たちの世界をつなぐ道として描出されている。あの世とこの世を結ぶ道なのである。これには、真謝島と本土を結ぶ「渡し船」と同じ意味が賦与されていると私は思う。

最後、正吉のつくった御嶽参りの道としても登場している。

正吉の予定より三十分早まり、午後一時半、正吉は和歌子に誘導されるように玄関を出た。おかみも念入りに化粧していた。石垣の角を曲がり、長い一本道を進んだ。陽が正吉の顔をつきさし、汗が首筋にながれこんだ。

とある。この「長い一本道」こそ、御嶽の神へ通ずる道なのである。

沖繩の「元氣さ」の背後には、素朴ではあるが、死の世界、神の世界へ通ずる認識が根強く潜んでいる。

四 ユタと正吉

神の世界と現実の世界を媒介とするものとして、「巫女」的存在がある。沖繩の場合、それにあたる人は「ユタ」である。「ユタ」になっている人々は、一般的に言って生い立ちが不幸極まる人であったり、人生において辛酸をなめつくした人であったりさまざまであるが、女性であるということが必要条件である。また、ユタになるには、「生死の境を何度もさまよったり、夢遊病になりながらまわりの人には見られない白い装束の女と一緒に各地の御嶽を巡礼してきたり、死者の霊が見えると口走ったり、夢知らせを聞いたたりしなければならぬ」のである。また、「ユタ」は、「神がかかるような状態になり、占いや病氣治療や人生相談まで行う、便利といえれば便利な存在」なのである。正吉は自分自身の生い立ちも手伝って、ユタに関心を抱き、「大学の講義を受けずに、大学の図書館にいりびたって、ユタの聞き取り調査集や、マブイ込めの実例の本などを読み耽っている」のである。

正吉は男性であり、ユタそのものになることは出来ないが、その生い立ちからして、ユタ的要素を多分に持っている。まず、正吉の出生に関してである。

正吉の母は「ごめんね、正吉」と、よく泣いた。正吉は長い間わけがわからなかった。ある夜、自然にぼつと蠟燭が灯ったように「何度もおまえを墮ろそうとしたんだよ」と正吉の母は言った。正吉の母は五人の女の子を産んだ。六人目を身籠もった時、我慢ができなくなっ

た夫に女腹とひどくなじられた。正吉の母は水に浸かったり、お茶を大量に飲んだり、石垣から飛び下りたりした。しかし、まもなく正吉が産まれた。

とある。この描写からすると、正吉がこの世に産まれて来たこと自体が不思議なことであり、本来ならば、この世に生を受けていないのである。いわば祝福された誕生からは程遠い存在だったのである。

父は父で、普通の死に方ではなく非業な死を遂げているのである。

正吉の父は真謝島の漁師だったが、ある日、真謝島から数十キロ西沖合の漁場にサバニを出し、ふたつにぶつ切った鯖を針にかけ、海に投げ入れたとたん、大魚が食いつき、糸が腕にからまり、あつというまに海中に引きずりこまれた。三日後、正吉の父の腕が切れかかった無残な死体はともあろうに真謝島の海岸に流れ着いた。

とある。「真謝島には、非業な死に方をした者は十二年間墓に納骨できないという風習がある。正吉の父の骨は故郷の真謝島の海岸に風葬されたままになつている。」のである。

また、母は母で、

母は夫の死後、真謝島から子供たちと一緒に祖母のいる本島の与那城村に渡った。生計のみちがなかった母は夜逃げした祖父の豚小屋を使い、豚を飼いだした。だが、母は毎日、直径が一メートルもある大きな鍋に豚の餌を煮ていたが、かまどの火にあたり、豚の発狂したような鳴き声をあげ、しだいしだいにおかしくなつた。

とある。祖父母にしても同様である。

正吉の祖母は酒乱の夫に文句を言いながら、いつも逃げまわつてい

たが、ある日豚小屋の中に隠れていた時、急に産気づき、正吉の母を産んだ。母が産まれた何カ月か後、正吉の祖父は酒代の借金のかたに豚を差し押さえられたが、競売期日の前々日の夜中、一匹の大きな豚を小舟にのせ、海を渡り、行方不明になつた。

とある。父・母・姉妹・祖父・祖母たちすべて、正吉の肉親たちは、当人はどうであれ、他人から見ると「不幸」と言わざるを得ない生き方、死に方をしてるのである。このような家族・肉親のこの上もない不幸によつてか、正吉は「強烈にユタに関心を持つ」つよになつたのである。男性ゆえに、ユタそのものになることは出来ないが、多分に、ユタ的存在として、この作品では重要な位置をしめてるのである。

*

突然飛び込んできた豚に襲われ、「和歌子が魂を落とした」時にも、和歌子に頼まれ「魂」を込める真似をする。込めているうちに、「いったんユタムニー（ユタの言葉）に似たものの言い方をしたら、口からひとりて言葉がでてくる」のである。正吉自身にも「不思議な感じ」がするのであるが、それがスナックの女性たち三人を信用させてしまうのである。

そんな正吉が、三人を御嶽に導いてゆく。

三人の女たちは正吉に泡盛を飲ませながら、明日から真謝島への御願行きを何度も念を押した。正吉は一昨日と同じように約束した。安心した女たちは身の上話を始めた。

とある。三人の女たちは、それぞれに人に言えないような辛い過去を持っている。しかし、夜の世界で生きている彼女たちは、お客にはいつも嘘を言い、本当の自分の心の奥底を語ることはないのである。常に「安心」す

ることができないのである。このような中にあっての正吉の存在は、彼女たちにとっては救いなのである。「安心」したからこそ「身の上話」を始めるし、その「身の上話」には三者三様の不幸と悲しみがある。不幸は人を殻の中に閉じ籠もらせるが、「安心」が与えられれば、その「殻」の中から自分をのぞかせ、本心を見せる。正吉は自分自身の不幸をよく知っているが故に、他人の悲しみを自分の悲しみとして悲しむことができるのである。そんな正吉の前に三人は語り始める。

(暢子の身の上)

・……夫は、やっと私が五年目に子供を身籠もったのにさ、何も知らずに死んだの。

・「弟さんを夫にしたのよ」

・「あの子ももう中学生になったけどね、一人娘だけど、喘息が持病でね」

・「……偽ユタにひっかかってね、百万もだましとられたのよ」

とある。そしてこれらの不幸の原因は、「どうしても夫のような気がするのよ。私を許さないのよ」と思っているのである。そして、「私では解決できないから、あなたに相談しているのよ」と正吉に頼ろうとするのである。

和歌子も同様であり、暢子に続いて自分の「身の上話」を正吉に聞いてもらおうとする。

(和歌子の身の上)

「姉は十年前に死んだけど、今でも、私とすれちがう人なんか、友子さんと姉の名前を呼んだりするの。私は恐くなってね、眠れないの。」

だって、私と姉は全然にできなかったのよ」

「……」

「みんな死んだのよ、母も父も、姉も赤ちゃんも。私一人よ、死んでいないのは」

「あなた、赤ちゃん、いたの？」

暢子が口をはさんだ。

「いたのよ。亡くなったのよ」

とある。そして、亡くなった赤ちゃんについては、「私たちが探せないだけよ、かくれんぼしたまま出てこないのよ」と思っている。暢子にしても和歌子にしても、どこかでこの世とは違った世界を信じているのである。

ママのミヨだけは、すぐに身の上話をしようとはしない。「人に言っても解決しないのよ、私は真謝島の神様に言うよ」と一時告白を保留する。

しかし、真謝島へ行き民宿で飲んだ夜、窓から落ちた「おかみ」を診療所に送って行く道すがら、正吉とミヨは話すのである。

「私ね、ここに懺悔に来たのよ。明日神様にしなければならぬのよね、今夜正吉さんにしたらだめなのよね」

「私は自分ひとりの胸にはしまえないのよ。心の内では毎日何度も言っているのよ、声に出したいのよ」

と、その一部分をひそかに正吉に告白する。しかし、その告白はミヨにとって充分なものではなく、「誰も話をまとも聞いてくれないから、診療所のおかみに聞かせに行った」と言うのである。暢子にしても、和歌子にしても、次第にこころが打ち解けて、「ほんとうの話」をするのである。

「夫にうらぎられ離婚した話」、「歯科衛生士にすてられた話」、「自殺未遂

の話」……と、次々と告白するのである。正吉はそれぞれの女性の告白を聞きながら、

俺はただ女たちの告白めいた話の聞き役だったのだが、なぜ神の使
いのような扱いをされるようになったのだろうか、

とか、

女たちは、何か馬鹿馬鹿しいけど必死に生きている。必死に生きて
いるけど悩みにみちている。御嶽に連れて行ったら女たちは救われる
だろうか。ほんとうに連れて行くだけでいいのだろうか、俺は何もし
なくていいのだろうか。

などと思ったりもする。正吉は、このように自問自答を繰り返しているが、
女たちは正吉を信じているのである。そのような正吉は、ユタそのもので
ないにもかかわらず、多分にユタ的存在として描出されているのである。

またこれに加えて、正吉が十九歳の大学生であること、三人の女性と危
ない関係を保ちつつも性的関係からは免れて中立を保っていること、豚を
食べたが食中毒にはならなかったこと等は、この作品中にあって、正吉の
ユタ的存在を補強する重要な要素ともなっているのである。

五 下痢と浄化作用

豚がスナックに飛び込んできたのが契機となって、厄払いのために真謝
島の御嶽参りをするようになる。行くことが決まるや、安心したのか三人
はそれぞれの辛い過去を、次第次第に正吉に告白しはじめる。和歌子、暢
子と……、ミヨは「私は神様に」と言いつつ、ほんの少しではあるが告白

する。実はこの告白作用自体が重要であり、ここにわだかまっていた、
それぞれの女性のこころの浄化作用にほかならないのである。ユタは、こ
の世で苦悩している人たちの告白を聞き、あの世の先祖の霊たちと交信す
ることにより、こころの浄化を行った媒介者である。この場合には正吉が
この役割をになっているのである。いわば、それぞれの女性の告白を聞く
ことにより、女性たちの心の浄化が、「魂の癒し」が、徐々に進んで行く
ことを手助けしているのである。

民宿に泊まった夜、皆は大いに飲み食いし、「ほんとうの話」をしよう
とする。

「ほんとうの話だけをしようよ」と暢子が言った。少し舌がもつれて
いる。「お店ではほんとうも嘘もあるけれど、ママ、ほんとうの話だ
けをここではしようよ、じゃないと、私、みじめになるのよ、ママ」

「ほんとうの話をしましょう」とミヨが言った。顔色は変わらないが、
目がとろりとしている。

「せめて、三人だけでもね、世界中の人が嘘をついてもね。あ、正吉
がいる。四人ね、訂正、四人だけはほんとうの話をするのよ」

「そうよ、悲しみも悩みも悪い関係なくよ」和歌子は箸を置
き、グラスをかかげた。

「私、誓うわ」

「ほんとうの話をするって、むつかしいって思っていたけど、ほん
とうはやさしいのね、ママ」

と暢子が言った。

「嘘をつくのがむつかしいのよ。作らないといけないし、帳尻をあわ

さなければならぬから、ね、正吉さん」

「正直になろう」

正吉は言った。

「じゃあ、みなさん、乾杯」

和歌子の声にあわせ、乾杯をした。

とある。そして和歌子と暢子とは、この夜、自分たちの過去をほぼ告白し、心の浄化を済ませることとなるのである。ミヨだけは少し違う。やっとのことで正吉に告白し始めるが、まだほんの一部分であり、まだ、本心から告白するまでには至っていない。和歌子・暢子に比べれば、ミヨだけは、心の浄化はまだ不十分なのである。

御嶽参りの当日、大雨で御嶽参りが中止と決まった時の、和歌子とミヨの反応はまるで違う。和歌子は「自由行動を喜び」、ミヨは「今日は御嶽に案内しないの？ 明日はお店を開けなければならないのに、あなたが責任をとるの？」などと文句を言うのである。

この大雨は、一面、天地自然の浄化作用とも考えることが出来る。またこの雨は、私たちのこれまでの辛い人生を一変させる、運命の大雨であると象徴的に考えることもできるのではないだろうか。

*

それはともかく、この大雨で御嶽参りが中止になったこともあって、ミヨは、自分の告白を聞いてもらおうと、「診療所のおかみ」に会いに行く。その帰り、昨夜のお礼にと、「豚の腸や肝」をもらってくる。それを三人は料理し、「最後の晚餐」と称しながら、また、「この豚、男かね、女かね」と冗談を言い合いながら、大いに飲み食いをする。その結果、三人はその

「豚の扱い」論

豚にあたってしまふ。それからが大変である。

和歌子の状態については、

腹部を押さえながら廊下の奥に走りだし、激しくトイレを開け、閉めた。鋭い下痢の音がした。

とあり、暢子とミヨについては、

暢子は枕を抱き、足も背中も曲げ、壁に向き、寝ている。ミヨは仰向けに寝ている。顔は青白く、死んだように身動きしない。

とある。和歌子、暢子、ミヨの順にひどいあたり方をしていく。

正吉は三人の彼女たちのために、夜中薬をもらいに診療所に走る。そして、もらって来た薬を三人に服させる。そして思うのである。

死んだように静かになつたら、ふと正吉は女たちがかわいそうになつた。女たちは胸の中に苦しみやら悩みやらを抱えているから、俺についてきたんだ。夜中寝かされなかつたからと、腹をたてたのはまずかつた。ひとりだけ中毒しなかつたのも悪い気がする。

と。

翌日になり、どうやらおさまるが、ミヨだけは相当まいっている。

夏布団に寝込み、和歌子が呼ぶと目を開けるが、すぐ閉じる。「……ママ、水も入らないから診療所に入院させたいな」と和歌子が言った。

……(中略)……

しばらく後、正吉もミヨを背中にもせおい、診療所に向かった。とあり、一番ひどいあたり方をしたミヨは診療所に入院してしまふ。

「下痢がこんなに強くあたるのは、なにか原因があるのではないだろうか」と正吉はふと思ふ。食中毒の重い順に考えて行くと、ミヨ、暢子、和

歌子の順になつてゐる。これには年齢的な体力が原因となつてゐるかも知れないが、苦しく辛い人生体験の深さと関係してゐるのではないのか。告白がすぐ出来る和歌子・暢子、「神様に言うよ」と言うミヨ、他人から見ると同等にみえても、本人にとつてのわだかまりの深さ悩みの深さからすると、ミヨが一番深く人生に傷つてゐると考えられる。この食中毒のあたり方の順は、本人のもつてゐる悩みの深さに関係し、心身共に浄化されるという点からすれば、この食中毒のあたり方の順というものは、こころの傷の深さと大変関係があるように私には思へる。

告白・大雨・食中毒と順にみてきた時、これらは、俗を清め、心身共に清めるといった意味で、御嶽参りの前提条件として大変重要な意味をもつものなのである。心の浄化、天地自然の浄化、身体の浄化……それぞれがそれぞれのけがれを払い落としながら、最終的浄化・「心の癒し」へと向かうのである。

六 新しい御嶽

沖繩には厄介が生じた時や家の新築、結婚、旅立ちなどをする前などなく気持ちがおちつかない時、女たちが沖繩本島や離島の方々にある御嶽にお参りに行く、という習わしがある。この「お参り」を御願といつてゐる。御嶽には、神社のように鳥居があるわけではなく、ただ、コンクリート製の、数十センチの四角い香炉だけが置かれてゐる。香炉の周りを鬱蒼としたクバ（ピロウ）やガジュマルの神木がとりまいてゐる。祖霊神、島立神は、このような神木を伝い天から降り

てくるといわれている。

というように、御嶽について説明してゐる。また、「この神島だから、方々に御嶽はある。何十年も何百年も人々が御願した御嶽がある。」とある。その一つに女たちを導こうと正吉はするのであるが、正吉には、一つの気懸かりなことがある。風葬されてゐる父の、門中墓への納骨である。女たちが食中毒に悩まされ、懸命に御嶽参りを願つてゐる時、正吉は風葬されてゐる父の骨を捜し求め、その地にやってくる。そして、そこに見た、白骨となつた父の姿は、次のようなものである。

骨は神々しく白かつた。いうにいわれぬ光沢を放ち、どこもかもぐつとひきしまり、不純なものは微塵もなかつた。正吉は横に座つた。だが、正吉の父の顔はそっぽを向いてゐる。正吉は向こう側へまわつた。正吉と目が合つた正吉の父は笑いかけた。正吉も笑つた。骨を拾ひ、門中墓に納めるといふ正吉の決心は崩れた。……（中略）……

骨がこのように綺麗だとは正吉は思いもよらなかつた。胸がふるえた。父の骨は風雨に晒されてきた、苦しんできた。だから、悟つた。神に近づいた。十二年の長い年月一心に耐えたら凡人でもきつと神になりうる、と正吉は考えた。真謝島では非業の死を遂げると十二年間風葬にされるが、逆にこのような仕打ちをうけたために、父は美しく、たくましく変わり、神になつた。このままここに祀ろうと正吉は独り言を言つた。父が待つてゐるのは神じゃない、父が神になつたんだ。拝みに来る人間たちを待つてゐるんだ。どのような死に方をしようと、十二年も海を見ていたら神になるんだ。

とある。このような父の姿、その「神々しい」父の白骨をみて、「父が神

「……正吉さん、どうしたの？ だまって」

正吉の本来の目的は、女たちを救うことと父の骨を納めることであつた。女たちを救うためには、どこかの御嶽に導いて行けば、それで充分なのかも知れないが、正吉には何か空疎な感じもある。父の骨は門中墓に納めれば、それで事足りるのであるが、父の骨を見てみるとそれも不自然に思えてくる。この空疎さ不自然さを正吉なりにぬぐおうとすれば、父の骨を祭つたところを御嶽とし、そこに女たちを導けばよいのである。しかし、これは本物の御嶽ではない。

骨のある場所は聖なる場だ。何十年前、何百年前の御嶽だろうと、最初は誰かが造つたんだ。俺が造つた御嶽だと白状したら、女たちは御願してくれるだろうか。嘘をつきとおすしかないのだろうか。

などと正吉は考える。確かに御嶽は神聖なる場所で、勝手につくることができるものではない。しかし「最初は誰かが造つた」と考えれば、神聖だと後の人々に思われるようになれば、そこに御嶽は誕生する。この考え方は、伝統的と思われるものすべてにあてはまる。このような切なる思

いから、正吉は父の骨を祭つた自分の御嶽をつくりあげるのである。そして、正吉の造つた御嶽へ女たちを導いて行く。行きながらも正吉は不安に思う。

「……正吉さん、どうしたの？ だまって」

「豚の報い」論

「気分が悪いの？」

和歌子が正吉の顔をのぞき込んだ。

「……俺たちが行く御嶽は、御嶽のような、違うような、御嶽なんだが……ついてくる？」

正吉は冷汗が出ている。

「ママ、スコップを見ただろう？ 父の遺骨があつたから御嶽を造ってきたんだ。俺は自分を救うのが精一杯だ。……この島には本物の御嶽がたくさんあるから、申し訳ないけど、あなたたちのいいようにしてください」

「……私は正吉さんの御嶽を信じるわ。淋しくなつた人が巡拝する御嶽よ」と和歌子が力強く言った。「信じない人は帰つて。私ははるばる救われに来たのだから」

ミヨが正吉の肩にやさしく手を置き、言った。

とある。まさに、ここに、新しい御嶽の誕生がある。それは歴史的瞬間でもある。伝統的な芸能にしても、信仰にしても、「最初は誰かが造つた」ところから始まり、それを受け継ぎ伝える人々が出て来ているから、伝統となり、信仰となって、今に生きているのであろう。時代によって蘇えらなければ死滅してしまうだけである。それが伝統・信仰の宿命である。

七 新しい伝統と現代の精神

信仰という面に限って考えてみる。古くから伝えられている宗教、新しく興つて来た宗教、宗教ともいえないような宗教等、さまざまなのが信

仰の対象となつてゐる。人によつてはこれ一つでないといけないとか、他の人によつてはどれでもよいとか……人それぞれである。要は自分自身か「何によつて救われるか」、「魂が癒されるか」という一点にかかつてゐると思ふ。

正吉たちは民宿に泊まるが、その民宿には、

壁には額に入った色付きの人物画が何枚も掲げられていた。

「おばさん、たくさんの神様ねえ」と和歌子が一枚一枚見上げながら言つた。「キリストでしょう？ お釈迦様でしょう？ あとはわからない。火の神様かな、お猿さんみたいな神様もいるわね」

「鬼のような面をかぶつたのも神様？」

楊子が誰にもなしに言つた。

「みんな、ありがたい神様ですよ」

おかみさんが和テーブルを畳の上に置きながら言つた。八畳間だつた。

「おばさんは、どの神様を信じるの？」

和歌子が聞いた。

「うちはどの神様も信じていますよ」

「救われた？」

「どうでしょうかね。うちはもともと罰あたりでしたからね、だけど、あんまり罰があたらなくなつたからね、救われたんですよ、きつと」

とあるように、多くの神様の人物画があり、おばさんは、それぞれの神様を信仰してゐるのである。救われたと自分で思うことができれば、その人にとつてそれは立派な神様ではないのだろうか。

正吉が造つた御嶽、それは他の人から見れば御嶽でもなんでもない。しかし、「正吉さんの御嶽を信じるわ」と言つてくれる人があることによつて、偽の御嶽も、信じる人にとつては本物の御嶽となるのである。

本物は本物として、その光が放たれてゐる間はそれでよい。形式とか儀式にこだわり、精神が失われてしまつた時、いくら本物でも、その本物は死滅する以外に道は残されてゐない。今日、伝統的な多くの宗教は立派なものであるにもかかわらず、旧態依然としてゐるため、その命を失いつつある。若者の、そして庶民の本当の救いとはなつてゐない。本来ならば、本物を本物として再生する活力と、それを現代に蘇らせる新しい精神が必要である。しかしそれらは組織的伝統と形式に阻まれ、蘇ることは甚だ困難なのが現状である。しかし、現代人の苦悩は増加する一方であり、信仰というよりはカウンセリングによつて、多少の「心の救い」・「魂の癒し」を得てゐることが多い。得るといつても、それは表層的救いのみであり、根本的救いとはなつてゐない。信じるには知性が邪魔をし、信じることによつては救われてゐない。近代の知的精神が陥つて行く状況、すなわち孤独状況はますます深刻な問題となつてゐるのである。

又吉栄喜の「豚の報い」には、その孤独とはほど遠い、個々人の、女たちの生へのバイタリティーが感じられる。正吉の造つた御嶽を信じようとする肯定のエネルギーが横溢してゐる。新しいものを創造して行くエネルギーが泌々と感じられる。まさに、現代日本人の精神の中に失われつつある原初のエネルギー、生を肯定して行く力がみなぎつてゐる。死と隣り合わせの中で生きてゆこうとするひたむきさが、全編にみなぎつてゐるのである。正吉は新しい伝統、信仰を造り出す側の人、女たちは、それを支え、

新しい信仰を盛り立てようとする側の人なのである。又吉栄喜「豚の報い」には、新しい形の、現代を生きる人々の新しい救いの構造が提示されるように私には思われる。

知的に、有為に、忙しく生きようとすればするほど、孤独と苦悩は増してくる現代にあって、「魂の癒し」となるものは何なのか。素晴らしく立派な教義をもった思想、宗教であれば申し分ない。しかし、信をもつエネルギーを失った人たちにとっては、いかに素晴らしく立派な有難い教義に接したからといって、すぐに「魂の癒し」があるわけではない。何か自由に安心してここを開ける信じられるところが必要なのである。正吉の御嶽は世間の目から見れば偽のものであるが、女たちにとっては真なるもの、こころ開かれる「魂の癒し」となるものなのである。人間にとって大切なのは、高邁なる理念と現実の救いなのではあるが、悲しいかな多くの人は現実の救いや癒しをまず求めてしまうのである。

このように考えて来た時、今を生きる者にとって、孤独と苦悩を癒してくれる古い伝統の再生、もしくは、新しい伝統の創造が必要なのではなからうか。カウンセリングだけでは一時の対症療法でしかないと思はさう。

最終の箇所には、生きとし生けるものを相対化するかのようには、一つの遠景が描写されている。

五人の頭に地表の生き物から生気を吸い取るような陽がじりじりと降り注いだ。草花からは鮮やかな色が消え、虫は穴ぐらや葉陰にじっと身を潜めていた。五人の両脇の岩陰からポツポツとアゲンの木が首を出していた。正吉が先頭に立ち、暢子と和歌子が並び、すぐ後

にミヨが、最後におかみが続いた。地面に落ちた五人の黒い影もゆつくりと進んだ。

とある。泣き笑いの珍道中を演じながらも、救われんがための御嶽参り、それらの人々の人生を相対化するような、生に照らされた死への行進、私には、この最後の場面が悲しく辛く思われる。これは孤独の寂しさというよりも、死と隣り合わせに生きなければならない、そして、生きるということと悲喜劇を演じながら、どこかで救われたいとする、人間としての生の寂しさ、悲しさを見つめた筆者の生へのまなざしのように思われてならないのである。

(コミュニケーション学科)
(一九九六・一〇・二九 受理)